

目次

◆金賞

誇れるまち、福島市

◆銀賞

コロナ禍で感じた故郷と幸せについて
一等星を見つけて

◆銅賞

幸せに暮らせるまちにするためにどうするべきか
幸せを感じる、福島朝
虫とり網を持つ子どもたち

福島市民インテグリティ宣言
愛犬と私の目を通して見た街

私の生涯学習論

齢五十のチャリ通勤

幸せいっぱい暮らせる町・また来ます

幸せいっぱい暮らせるまち

テレビに字幕を

『好き!』を見つける学び

差と種類

ペンネーム	さと	1
ペンネーム	焼きサバ塩定食	2
ペンネーム	穴戸孔哉	3
ペンネーム	菅野香澄	4
ペンネーム	五十半ばのお父さん	5
ペンネーム	松永翠	6
ペンネーム	岩本夏海	7
ペンネーム	藤井あき子	8
ペンネーム	五十嵐登	9
ペンネーム	ホントは四九	10
ペンネーム	こんのひろ	11
ペンネーム	酒井勇	12
ペンネーム	五十嵐貴子	13
ペンネーム	佐藤美穂子	14
ペンネーム	無色人	15

金賞

「誇れるまち、福島市」

ペンネーム

さ と う

「福島市、とってもいいところだよ！」

大学時代の友人に福島市での生活はどうかと尋ねられた時、私は胸を張ってこう答えている。

四年前、就職を機に縁もゆかりもなかった福島市に引っ越してきた。ひとり、不安でいっぱいだった私を元氣付けてくれたのは、福島の大自然だった。吾妻小富士と雪うさぎ、桃源郷・花見山…。春を彩る壮大な福島を自然の前にして、自分という存在、新生活への不安という悩みの小ささを痛感した。そしてなんだか勇気が湧いてきた。大自然が私に送ったエールだったのかもしれない。

そして、始まった福島市での新生活。驚いたのは人のあたたかさだ。腰が低く、謙虚な人がとても多い。買い物のため入った店の店員さんが丁寧で優しい。以前住んで

いた町では、客がレジで店員さんに怒鳴り込んでいる光景など日常茶飯事だったが、そんな人はこちらに来てから一度も見えない。ゆったりとした時間が流れている。

食べ物もとても美味しい。通勤途中にフルーツの自動販売機があり、よく季節のフルーツを購入しては家で贅沢に丸かじりする。名物の円盤餃子はお酒によく合う。

そしてマナーを守る人が多く、街が美しい。今年七月、福島駅周辺のゴミ拾いイベントに参加したが、あまりのゴミの少なさに驚いた。多くの人が行き交う駅前が美しいというのは全国に誇れることだ。

福島市のいいところをたくさん書いた。私は福島市で幸せに暮らしている。しかし私が生活する中で、一つだけ悲しかったことがある。それは四年前、外部講師による新人社員研修での出来事だ。駅前の施設に、福島市の様々な業種の新入社員が二百人程度集まって研修を受けていた。そこで講師が「福島市が好きな人、手をあげて」と言った。私を含め七、八人が手を挙げた。次に「普通の人！」と講師が尋ねると、その場にいた多くの人が手を挙げた。私はとても

驚き、悲しくなった。自分の住むまちを誇りに思えないなんて非常にもったいない。福島市には魅力がたくさんあるのに、それに気づいている人が少ない印象だ。

福島市で暮らす人がみんな幸せなら、私はもっと幸せだ。少しでも多くの人に自分のまちを誇りに思ってもらえるように、自分にできることを見つけ、取り組んでいきたい。

また、福島市の未来を担う一人として、福島市民憲章を胸に自覚のある行動をしていきたい。

銀賞

「コロナ禍で感じた

故郷と幸せについて」

ペンネーム

焼きサバ塩定食

幸せ、これは全人類が求めているのにも関わらず、その基準はあいまいで、感じ方も人それぞれではないだろうか。私は学生時代、数々の級友が幸せを求めて、都会に旅立つのを見送ってきた。

「お前もいつかは福島から出るんだろ」と言われ、私は「うーん、考え中」とごまかしていた。本当は勇気がないだけだった。慣れ親しんだ故郷から出ることが、私の求めていた幸せなのだろうか。と葛藤する学生時代だったと記憶している。

そのような中で、新型コロナウイルスは都市部を中心に猛威をふるい始めた。県外への移動自粛、GW、お盆、年末年始の帰省見送りが叫ばれ、ここ二年は故郷のぬくもりに思いを寄せる人々が増加したと感じる。特に新生活を始めた若者の心中を察す

ると、他人事ではなく、胸が一層痛む。

私はこの二年を経て、ある言葉の意味を深く感じるようになった。それは、ジブリ作品の「天空の城ラピュタ」のヒロイン、シータが、ムスカに言うセリフだ。

「土に根をおろし、風とともに生きよう。種とともに冬を越え、鳥とともに春を歌おう。土から離れては生きられないのよ。」

このシータのセリフは、私にとって福島市の自然豊かな、人情味あふれる見慣れた風景を彷彿とさせた。それは、コロナ禍で疲弊した私の心に水を与えたようだった。

そう、あの桃の香り、ご近所さんのあたたかさ、小川のせせらぎ、どこへ行っても、どれも昨日のことのように思い出せる。私はこのコロナ禍において、福島市で生まれ育ったことを誇らしく感じると同時に、故郷の自然豊かな環境は、生まれ育った私たちの心を癒し、どれほど大切な存在で、尊いものなのかを深く感じる事ができた。どこへ行っても、故郷、福島市は私の「このころの幸せ」大きく関わっているのだと改めて感じた。

私は今回、就職先に縁があつて、市外へ

行かず引き続き福島市に滞在することになった。だからこそ、この「このころの幸せ」をこれからも多くの人々と共有していきたいと考えている。私が見送った級友はじめ、福島市に生まれた人、観光や仕事で来た人すべてにご縁つなぎができるよう、福島市民憲章の目指す福島市を私なりに、私のペースで、ずっと目指していきたい。そして、私の子どもや孫、その先も、ずっと福島市は「心の幸せ」感じられる故郷であつてほしいと願っている。

銀賞

「一等星を見つけて」

宍戸孔哉

平成二十七年三月、高校生活が終わった。多くの同級生はこの街を離れ、新天地での生活を始めた。そんな中、私は福島市に留まることを決めた。

福島市での大学生活。大都会で華やかに一人暮らしをするという「理想」とはかけ離れていた。私は、自分自身を不幸だと思った。理想と現実の差は徐々に私の心に影を落とした。やがて、大学に行けなくなった。

留年が決定した。もう四年で大学を卒業することはできなくなった。しかし、四年で大学を卒業するために、時間に追われている同級生と比べる必要は、もう無い。「やりたいことを、やろう」今まで周りのことばかり気にしていたが、初めて自分の気持ちを優先させた。何かが吹っ切れた。

イベントの案内が来たら、時間の許す限り参加した。福島市で夢を実現させようと、頑張る人たちの話を聞いた。みんな、一等

星のようにキラキラと輝いていた。

私は今までの自分を恥じた。大都会で華やかに暮らすことだけが、幸せなのだろうとして思ったのだろうか？地元に残ったって、輝ける人はたくさんいる。素敵な人もたくさんいる。自分が幸せになっていないのを、福島市のせいにしてはいないか？福島市は自分を育ててくれたのだ。今度は自分の手で、福島市を幸せ溢れる街にする番だ。

「ずっと福島にいる。私は福島で幸せになる」私は腹を決めた。

数年後、就職活動が始まった。私は福島市で働くことを決めていた。就活は焦りあり、涙ありといういろいろあったが、今の職場とご縁があつて、無事社会人になることができた。

今の職場では、私よりもさらに先の未来を担う、子どもたちの支援をしている。子どもたちの笑い声を聞いたり、笑顔を見たりすると、私も不思議と幸せな気持ちになる。

この秋、私は自作の物語を動画として作り始めた。職場で出会う子どもたちの笑顔

を、もっと見たいと思ったからだ。笑顔によつて幸せを感じる人が増えてほしい。

物語の作り手としての私はまだまだ成長できると感じる。書く力をつけたら、私が見てきた福島市の輝きや、福島市にいる幸せを、動画にしてみたい。それが、私なりの福島市への恩返しだと思っている。

銅賞

「幸せに暮らせるまちにするために
どうすべきか」

菅野 香澄

幸せに暮らせるまちにするためにどうすればいいか、子どもと高齢者のつながりや子育てする人たちのつながりの場ができればいいと思います。ベビーカーで歩いていると、足場が悪い歩道が意外と多いことに気づき、歩道を広く平らにしてほしいと思いました。段差があると小さい子どもだけでなく、妊娠中の方や高齢者、車椅子の方もつまずきやすく大変です。子どもや子育てするお父さんやお母さん、高齢者や障害者も気持ちよく住みやすい福島市にするために補修してほしいと思いました。

浜田町の横断歩道で発光ダイオードライトが全国初で設置されたことを知り、その仕組みが素晴らしいと思いました。ボタンを押すことなく添えるのも感染対策をされていて安心します。新しく設置されたことで、高齢者の方が仕組みをすぐ理解するに

は難しいと思うので、子どもたちが高齢者に講習する場を設けることで、子どもと高齢者のふれあいにもなり、あたたかく優しい福島市のまちがつくられると思います。

子育てするお母さんたちが気軽に子どもを連れて他のお母さんとのコミュニケーションを取れる場やイベントがあると嬉しいです。福島市に住んでいて支援センターなどがありますが、子どもと一緒に足を運ぶには勇気がいることを経験しました。誰でも気軽に楽しく、不安を取り除き相談しやすい場やイベントがあると、ここで子育てできて本当によかったと親子の精神的な安心感にも繋がります。コロナ禍などで昔のようにみんなで子育てをするのが難しい時代になりましたが、感染対策をしっかりとされた場所でもまた人のつながりが増えていくといいなと思います。

銅賞

「幸せを感じる、福島朝」

ペンネーム

五十半ばのお父さん

今日も福島に朝日が昇る。

透き通る青空が広がる下で、今朝も愛犬と散歩をし始めると、ひんやりとした福島のきれいな空気がからだの中にしみわたる。

「おはようございます。」

どこからか聞こえて来る声。自転車に乗った高校生、集団登校をしている小学生の班長さん、大きなスポーツバックを担いだ中学生。みんな楽しそうに友達と学校へ向かっている。私も思わず「おはよう」と返事を返す。子供たちのこれからの一日を後押しする気持ちで。

心が「パツ」と明るくなる。

愛犬が私の顔を覗きながら、軽やかな足取りで、嬉しそうにしっぽを振りながら歩いている。

散歩も終わりに近づき、玄関に到着する

と、朝ご飯が食べたいのか、懐くような眼で私を見つめる。

ラジオの時報が鳴った。

どうやら、出勤の時間がやってきたようだ。車に乗り込み、「桃」、「梨」、「林檎」、「稲穂」畑を通り抜け、いつもの信号機にさしかかる。

横断歩道の手前では、黄色い旗を持つお母さんが通学生の安全を見守っている。

ふと、目を逸らすと目の前には左右に広がる「吾妻山」が迫ってくる。

ウサギ模様の残雪が輝きを放っている。

堤防沿いの車道の脇では、美しく静かに流れる「荒川」を望む。

今日もまた、私も新しい一日が始まる。

盛んな未来を創るため、住み易い福島を創るため、「福島の良さ」のバトンを君たちに渡し、愛が溢れる住み良い街をつなげて行っていくと思います。

銅賞

「虫とり網を持つ子どもたち」

松 永 翠

福島市では、セミが元気に鳴く季節になると、虫とり網を片手に公園に向かう子どもたちの姿をよく目にする。私は、この「虫とり網を持つ子どもたち」を見かける度に、自分が幸せな街に暮らしているのだということを実感する。それは、「虫採り」という遊びができる、豊かな自然が福島市にあるということを感じることができるからだ。

私自身も、幼少期のころは虫とり網を片手に、朝早くから自宅近くの竹やぶで昆虫採集を楽しんでいた経験がある。しかし、私の地元では、ここ数年で都市開発が進み、虫採りを楽しんでいた竹やぶも住宅街に姿を変えた。今となつては、昔の私のような、虫とり網を片手に遊ぶ子どもの姿は、ほとんど目にするものがなくなってしまった。自然が街から消えるというのは、子どもたちの「遊び」の選択肢を少なくしてしまう

のだということを最近身をもって感じている。

しかし、福島市には、人間も昆虫も、伸びのびと過ごすことができる豊かな自然がある。「虫とり網」を片手に遊ぶ子どもたちの姿も多く見かける。これは、私にとつて「幸せ」な街そのものだ。この幸せな街がこの先もずっと続くために、また、「虫とり網を持つ子どもたち」の姿が未来の福島市でも見られるようにするために、自らに出来ることを、今一度考えたいと思う。これは、残りわずかな福島市での大学生活の最大の私の課題だ。

「福島市民インテグリティ宣言」

岩 本 夏 海

お恥ずかしい限りです。福島市民憲章を知ってから四半世紀が経ち、ようやく五か条について解釈するようになりました。正直に言いますと、うち一条は、学生時代には読み飛ばしていたほどです。「きまわりを守り、力をあわせて 楽しく働けるまちをつくりましょう。」これを最近まで、わざわざ「コンプライアンス」と「ダイバーシティ」とに分けてイメージしていました。

福島市民憲章が作られた当時は、まだ「コンプライアンス」とか「ダイバーシティ」という類の言葉は普及していなかったでしょう。よく考えれば、きまわりを守ること、力をあわせることも、まずは「公平」の上に成り立ちますので、似たようなものかもしれません。いずれも、誰かに指示されて行うのではなく、「積極的かつ自律的な誠実さ」ゆえに行いに現れるべきものです。

これほど当たり前のことに気づいてか

ら、市民の資質や価値観としての「インテグリティ」を意識するようになりました。「きまわりを守り、力をあわせて 楽しく働けるまちをつくりましょう。」この一条は、いわば、「福島市民インテグリティ宣言」だと思います。

これほど画期的な一条をもつ福島市民憲章です。この一条を含めた五か条と前文の解説などをするセミナーを開催してはどうでしょうか。また、たとえば「福島市民インテグリティ宣言」のマークをつくって、組織単位でも個人単位でも使用できるものにしてはどうでしょうか。これらは素人の思いつきですが、そういった、福島市民憲章の半世紀を記念する事業を期待しています。

「愛犬と私の目を通して見た街」

ペンネーム

藤 井 あき子

六十歳で停年退職し、六十三歳で犬を飼いました。トイプードルとポメラニアンの

ミックスマスク犬で純白長毛の美しい犬です。ペットショップの説明では成長しても五キロ以上にはならないということでした。父親のトイプードルと母親のポメラニアンを私に見せてくれましたが成程どちらも五キロ未満に見えました。安心して買いました。家の中で飼う予定でしたから。ところがトイプードルの先祖返りとかで、愛犬はぐんぐん大きくなりました。とても五キロ以内に収まりそうもなく、また牡だったので仕方なく散歩することになりました。その日以来今日まで十年以上、朝夕二回年中無休で散歩しています。

行先は犬任せです。東西南北、一回約一時間、二回で二時間、多い時は一万歩くらい歩きます。おかげで街の様子がよくわか

るようになりました。仕事へ行っている時は、車通勤でしたから、さっと通り過ぎるだけでした。犬と歩くと、犬は臭い嗅ぎを絶えずしますから、私はゆっくりと街並を見学できます。感心するのは道路がきれいなことです。ごみも落ちていませんし、穴もあいていません。家々も殆どが良く手入れされています。

何件か空き家も見かけます。空き家であることはすぐ判ります。夏は雑草が伸び放題、冬は雪が降り積ったままだからです。

小さきままな公園がそこかしこに、適度な距離感で設けられていることにも感心します。公園ごとに遊具も異なります。工夫と配慮がされているのです。

スマホのニュースを見ますと世の中は忙しく動き、事件も次々とおきていますが、私が愛犬と歩く範囲内に限れば、のどかで静かで穏やかです。季節に応じ、街路樹や公園、家々の庭先で花が咲きます。愛犬は残念ながら花には全く興味を示しません。私が見たい花を、もつと近くでじっくり見たいと思っても、愛犬の歩きたいように歩くのがお約束なので、ついてゆくしかあ

りません。

退職した後、つくづくすごい事だなと思うのは国や県や市の行政機構が、実に緻密に構築され機能している事です。この事には感心を通りこして驚嘆するほどです。一つの例として国民健康保険証をあげてみます。毎年更新となる、この保険証は期限切れとなるその月にきちんと届きます。普通郵便で届きます。市の保険証発行を担当される方々の勤勉があつてのことでしょうが、この一人一人に正確に届くという郵便制度、治安の良さにはよくここまで組み立てられ円滑に回っているものだと感じ入ります。市民の一人として非常にありがたいと思っています。

安心して日常生活をすごせる幸せを、愛犬との散歩を通して実感している日々です。

「私の生涯学習論」

五十嵐 登

福島市民憲章のなかの一端に、「教育と文化を尊び」とある。

昨今の多様化する社会においては、高齢者も学習していくことが必要である。私は七十五歳から八十五歳まで、大学の聴講生として学習した。令和元年度は「心理学」の科目を予定していたが、例のコロナ禍のため中止された。

今後の予定として、市男女共同参画センターの「働き方生き方アップデート」と、市長寿福祉課の「地域ふれあい元気づくり楽校」がある。

また、日本赤十字社福島県支部の「認知症サポーター養成講座」も八月と九月は中止されたので、十月の予定に申し込んでいる。

そのほかには、他団体主催による「地域社会フォーラムIN福島」とか、講演会「読み直す福島の近代化」、市民向けシンポ

ジウム「原発事故から10年後の福島の森・川・海と食——復興に向けて残された課題——」など。

それに現在、大学教授などによる「おくのほそみち」と「万葉集」を学習している。それからアオウゼでは、毎月五講座ほど受講していたが九月は全部、中止された。十月は開講されるのかどうか。

とにかく、一度きりの人生であり、楽しく生活することが、なによりであると思われる。社会参加することにより、脳の活性化にもなり、認知症の予防になることを痛感している次第である。

いずれにしても、福島市は「非常に住みよい都市」であると思う。

（付記）

市民憲章は、昭和四十八年に制定されたので、令和五年度に制定五十周年になる。そんなことから市民憲章条例（仮称）を制定されたらと思う。そうすれば、より多くの市民に周知できるのではなからうか…。

令和三年九月二十日

「敬老の日」に書く。

「齢五十のチャリ通勤」

ペンネーム

ホントは四九

そこで鳴いているのはスズムシ。それともコオロギ。ジージー鳴いている奴は知っている。あんたはオケラ。どうぶつの森（ゲーム）で穴を掘りまくって散々探した相手だから間違いない。

実は私も半分泣きそう。今日は事務所に携帯電話を忘れた。その為、駅から片道三km、往復二回目のチャリ漕ぎ刑を実行中。福島駅西口の駐輪場は停める場所が数列あるから、置いた場所を忘れないように、柱の文字を写真で撮っておくのが私の日課。そして、今日も撮ろうとした際に、携帯電話を充電器にさしっぱなしと気づいた。

そもそも五十歳目前で何故にチャリ通勤をしているのかと言えば、八月中旬に車が壊れたから。そして、次が納車されるのが早くて十月下旬。その間は、バスとチャリを乗り継いで出勤するしか手がない。

家族は言う。「健康的でいい」とか「痩せるかも」と。でも、現実はそんなに気楽ではない。高校生の頃は、山越え込み片道八kmのチャリ通学をしていたけど、十代と四十代終盤では体力が違う。「帰りに月見バーガー買ってきて」と言われても、店に寄る気力がない。寝すぎて、降りるバス停を通り越した事も数度ある。

しかし、現状を嘆く事よりも、少しでも楽しい事をみつけようとするのが私の性分。そして、チャリ通勤中に可能な事は、わざと数本分の道を外れてみる事。すると、コンビニ隣の畑で、九月末でも咲いているヒマワリを見つけた。住宅地の合間に、車では入れない遊歩道を見つけた。名前は知らないけど、道端で咲いている花々も見た。中秋の名月も見た。見る気はなかったけど、駅前でナンパ中の男のパンツはアメリカ国旗柄だった。

数十年住んでいる街ではあるが、まだまだ知らない場所がある。で、ここはどこ。方面的には森合市民プール周辺かな。何度か線路を渡っていたら迷子中。

「幸せいっぱい暮らせる町・

また来ます」

ペンネーム

こんの ひろ

「んめいがら 食ってみろ。」

東京からのこけ女（こけし愛好女子）さん
「通訳して。」私「美味しいから食べてください。」

六月のじめじめした蒸し暑い日であった。薪ストーブの上には大きい鍋、味噌の良い香りがたよう。

土湯温泉のこけし工人の源さんの工房である。源さんは八十歳をとうに過ぎた長老のこけし工人である。山から木を伐りだしたり、ロクロで削ったりまだまだ現役の工人である。東京からこけし愛好家のこけ女さんが訪問するというので、匂のごちそうを準備していた。案内した私は、え！この暑いのにストーブ！と驚いたが、それは台所のない源さんの工房でのおもてなしであった。

地竹（じだけ・根曲がり竹）は味噌味で煮込んであり、口にする、タケノコのしゃきしゃきした歯ごたえと味噌の香りがふわーっと広がってとてもおいしい。暑くて汗がしたたり落ちながら頂いた。

福島駅から車で西の方に三十分ほど走ると、山あい湯けむりに包まれた温泉街が見えてくる。ここは温泉と土湯こけしで有名であり、全国各地から観光客が訪れる。素朴で純情可憐な伝統こけしは東北地方だけにあり、土湯こけしはその産地の南限にあたる。北限の津軽こけし、南限の土湯こけしは特に愛好者が多いようである。当日のこけ女さんはその愛好者のひとりであった。

まーるい頭に細長い胴、単純に描かれた顔と胴。昔、こけしは木地職人が愛児にせがまれて作り、農山村の女の子の玩具であった。それを手で持ったり、着物を着せて遊んでいた。こけ女さん「小さなこけしを作ってほしいんですけど。」源さん「タケノゴ食ってまってる！」

源さんはシューッと音をたてながら作り始める。無心で顔、着物を描いていく。

切れ長の目、細いたれ鼻、おちよほ口、縞模様の胴。目の前で完成してくれる。

単純だがちゃんと表情がある。可愛い。

こけしは作った人の心が表現される。タケノコのおもてなし、遠くからの来客の希望に応えたい心、優しい気持ち。これは福島人としての当たり前のことである。

源さん「こけしはあんだみでえにめんごぐつぐるんだ」「まだこ」

こけ女さん「通訳して。」私「こけしはあなたのように可愛く作るのだよ」「また来てね」

ここは、魅力のある風土と人情、可愛いこけしのふるさと。それだけで幸せいっぱいに暮らせる。

こけ女さん「次はあそこの工人を訪ねてみたい」と次の訪問の計画をする。

「福島にまた来ます」

「幸せいっぱい暮らせるまち」

酒井 勇

アンビックスメイプルと云う事務所が以前JR西口にあった。そこは何の宣伝もしないので一般の人には殆どわからない所である。

以前の事だが私がたまたまその事務所の前に通りがかった時、尿意をもよし耐えられなくなり道することも出来ず失礼を承知でその事務所にとびこみトイレを借りた事があった。あの時は本当に助かった。事務所の事務員に何度もお礼を云った。その折に御社は何のお仕事をしているのですかと聞いたところ、当社は全国組織で旅行をなさる方々にホテル（旅館）を、お世話する仕事をしているとのこと。私は女房と相談し早速この組織を利用して京都、奈良に十泊十一日の旅行をした。宿代は嘘のようだが通常の一割で済んだ。但し食事代を除いてである。当時の宿代を調べたところ京都では食事ぬきで一泊約一万五千円が相

場だと云う。何故こんなに安いのかと思っただが行って見てびっくりした。地元には専門の案内人が出迎に出ており行ってみると普通の民家で案内された部屋は六畳と三畳の日本間それに台所であった。泊まる人が掃除をして食事を用意して過ごして下さいと云うのだ。そんなことから私達は宿の近所で食事をとり夜は地元の居酒屋で飲みカラオケで歌った。

思うに、この旅は部屋代（宿泊費）が二人で四千円と云う信じられない安さで過ごせたのである。しかも福島にいたと同じような環境で気楽に過ごせたのである。この旅の満足感はあれからズーと続いている。冒頭のアンビックスメイプルの営業姿勢については、すこぶる評判がよく静かな評判が拡がっている。この制度を利用した人は知らない方々に教えるべきである。私達は体験したい事はどんどん導入し私達の街の幸せの為に今からでもいい第一歩を歩むべきではなからうか。ちゅうちょはしない、ね！「ありがとう」

「テレビに字幕を」

五十嵐 貴子

今年は東京オリンピック、パラリンピックが開催されて開会式や閉会式に手話通訳と字幕が付いて聴覚障害者も楽しめたと思います。特にパラリンピックでは障害を持ったアスリートがハンディに負けずに記録に挑む姿は感動しました。障害者の活躍には目覚ましいものがありこの機会に障害者に対する理解も深まったと思います。

昨年から、コロナ感染者に対する県の会見では手話通訳は付きましたが残念乍ら字幕は付きませんでした。同じ聴覚障害者でも生まれつき耳が不自由な方は手話を理解しますが成長してから聞こえなくなった中途失聴難聴者は手話が分かりません。音声情報に対する文字通訳が必要です。県の会見では要約筆記者が文字にして難聴者に情報を提供してありました。会見が夜に始まると文字起こしに長い時間が掛かり作業が深夜迄に及ぶ事もありました。現在はコロ

ナ感染者も減少傾向にあり、UDトークで字幕を配信出来るようになったので以前に比べると作業も大変楽になりました。

東京のテレビ局では毎日のニュースやドラマ、国会中継や政見放送等に字幕が付いておりますが地方のテレビ局では字幕が付かないのが現状です。聴覚障害者も健聴者同様知る権利があります。特に災害時等テレビに字幕が付くと安全に避難出来るので逃げ遅れたり取り残される心配がありません。難聴者が不利益を被らないように字幕が欲しいです。

加齢による難聴で高齢者は耳が遠いです。必然的にテレビのボリュームも大きくなり同居している家族にも迷惑が掛かります。家族が仲良く暮らす為にも字幕は必要です。

少子高齢化に伴い難聴者は増える一方です。コロナ禍で巣こもり生活が続くと外出を避けるようになりテレビを見る時間も長くなります。テレビに字幕が付いて難聴者が情報を共有するようになれば大変有難いことです。

「『好き!』を見つける学び」

佐藤 美穂子

「K君は何になりたいの?」

「なりたいものなんて何もない。」

「えっ、好きなことはないの?」

「ない。」

「大きくなったらどうするの?」

「ぼくは、早く死にたい。」

これは、学習塾をしていた時のお子さんと私のやり取りである。驚くことに、私がお預かりしたお子さんの半分以上同じ様なことを言われた。全員、小学生。それも、低学年。低学年と言えば、初めての学校で見るもの聞くもの触れるもの、全てにワクワクしている頃ではないか。

どうということなのか。

お子さんは、十人十色。同じ教材でも進めるスピード、終える速さがそれぞれ。興味がある所つまづく所、それらもまちまち。復習になる教材に苦戦するお子さんも多い。

「何回、習ったの?」と、きくと

「二回。」とのこと。

確かに、学校現場は忙しい。現実は一回で習得できる時があれば、二回で不足の時もある。学習塾は週二回。他にピアノ、スイミング、習字等々、一週間休みなしで習い事が入っている。聞いているこちらの目が回る。

沢山の学びの種が蒔かれているのに、希望ある未来が描けないのはなぜか?

出した答えは、「忙しさ」。大人も子供も忙しい。疲れている。世の中の時間の流れが速過ぎるのではないか。いつも何かに急かされている。

小さい頃に何かにじっくり取り組んで、疑問が解けたり思わぬ発見があったりした時の「ああっ!」を体験すれば、学びは楽しいと思えるはず。それは「好き」につながる。楽しい事は苦しくても続けられる。好きな事は苦しくても楽しい。「好き」な事があれば十才前後で「死にたい」とは言わないだろう。

社会の仕組みでどう仕様もない部分があったとしても、大人の工夫と努力でお子

さんの個性を尊重し育てることはできないだろうか。個性は「好き」な事をはらんでいる。言わば、「好き」な事の種が発芽するのを待っているということ。「好き」な事を続けるということは、希望ある未来につながる。

幸せの定義を「『好き』な事を生き生きとし続ける」とする。

学校でも家庭でも、お子さんの「好き!」を探すためにじっくり取り組み、目の先の幸せではない一生活き活きと続けられる事をみつけられる学びの環境を作ることが、「幸せいっぱい暮らせるまち」への一番の近道ではないだろうか。

「差と種類」

ペンネーム

無 色 人

今回のテーマを考えれば考えるほど、書けば書くほど「本当か？」という問いを何度も繰り返した。

「多様性」という言葉が頻繁に使われている昨今、「幸せ」の捉え方の幅が大きくなっている。例えば日常生活において些細なことでも幸せを感じられる人もいれば、社会問題を一つでも解決してくれたほうが幸せになれる人もいる。人によって差がある。また、私で言えば仙台や東京に行かずとも、福島市である程度娯楽が完結してくれたほうがとりあえずは幸せに暮らせると考えている。「幸せ」には種類もあるのだ。差があれば自分を通したくもなるし種類があれば否定したくもなる。行き過ぎてしまえば誹謗中傷などで相手を傷つけてしまうこともあるだろう。その中で幸せいっぱいに暮らせるというのは非常に難しいと感じる。

少なからず人はその「差」や「種類」によって不安や不満、悩み、自己嫌悪など「負」の感情を抱えながら過ごしている。だから「幸せいっぱいに暮らせるまち」と聞いて違和感を覚える人もいると思う。でも「負」の感情を抱えながらも「自分も必要とされている」「認めてもらえている」「共感してもらえる」そういった感情を抱ける場所やコミュニティが多種にわたってこのまちにあれば、少しはこのテーマのまちに近づけるのではないだろうか。「差」や「種類」を埋めるのではなく「理解する」ことが重要だと思う。

私はこの福島市民憲章が今の時代に合っていないと感じている。それは今までの常識に多くの人が疑問を持つようになっていくからだ。時代によってこのような章も変えていく、変えていける、そのほうがより人のため、まちのために繋がると考える。ただ否定だけではない。少しでも目線を変えたことで納得できた部分もある。きっと水が綺麗であることが幸せであり、みどりに救われた時代もあったのだろう。教育や文化を先人たちが大切に守ってきたことに

よって救われた人たちもいたのだろう。私も気付いていないだけで、もしかしたらその文化に救われてきたのかもしれない。また、将来必要なときにバリアフリーや新しい機能がそこがあればそれを幸せと感じるかもしれない。

昔過ぎず、未来過ぎず、ただし忘れることもせず、良いところは取り入れ、「今に合った幸せ」を考えることが重要なのだと改めて感じたテーマだった。